

内外交差点

「走るこども110番」になれるのが デザインという名の冒険③

成川 史華氏 (扇交通社長) 第11/12回

地域の安全をどう守るのか——。少子高齢化が進む現代において、子どもを取り巻く環境は、行政や警察だけでなく、地域全体の関与が求められている。そんな中で注目されるのが、「こども110番」の取り組みだ。タクシーの公共性を改めて問い直す事例としても、示唆に富んでいるのではないだろうか。

発端は、私がデザインした乗り場標柱(25年12月15日号参照)だ。そのデザインが好評で、「標柱だけで終わらせるのはもったいない」との声が上がった。そこで考えたのが、兵夕協として「こども110番」へ参画すること。街中の店舗などに掲示されるこの制度は、地域の協力で成り立っている。一方で、日本のタクシーは24時間365日、街を走り続ける。固定された拠点以上に、子どもが助けを求めやすい存在になれるのではないだろうか。提案は23年末ごろで、今は兵庫県警察との話し合いも一定進み、実施に向けた調整と作業が進められているところだ。

背景にあるのは日本のタクシーへの信頼性の高さ。乗務員は基本的に全員会社に雇用され、身元は保証されており、接客や安全面も世界的に見ても高水準。夜間に女性一人でも安心して乗れる極めて稀有な交通機関だ。実際、日本では子どもだけでタクシーに乗ることも珍しくない。塾の送迎など日常的な役割を担う事業者もある。海外へ目を向ければ、電車でさえ子どもを一人で乗せられない。そうした中で日本では、タクシーにも子どもを一人で乗せることが成立する国である。この前提があるからこそ、子ども自身が「困ったときはタクシーに」という選択肢を、持つ意義は大きい。親の安心につながるだけでなく、子どもの行動範囲も守るのだ。

県内には独自に「こども110番」を実施している事業者もいる。しかし、兵夕協として関与する意味は決して小さくない。協会が取り組むことで、警察や自治体との連携がより明確になり、地域全体での認知も進む。県下一丸となった取り組みになるように、是非、兵庫県のタクシー事業者の皆様にはご協力をお願いしたいと思っている。

現在、私自身が5歳の娘を育てている母親である。自分たちの仕事子どもたちの生活を見守り、犯罪の抑止力になるのだとすれば、親と

してもこんなに嬉しいことはない。近年、不法移民問題などによる治安への懸念も報じられているが、タクシーの安心・安全はこうした面でも発揮できるはずだ——と私は信じている。

もちろん現実的な課題もある。私が24年2月に提出した「こども110番」のデザイン(=下図)は、黒いタクシー車体に映える白基調で、親しみやすさを重視したものだ。しかし、当然だが、マグネットステッカーの配布や掲出には費用や調整を伴う。公共性の高い取り組みでありながら、コスト負担は業界側に寄りがちで、進捗が緩やかになることは残念ながら日常茶飯事。公共性の前では費用と手間といったコストは忘れられがちな話だ。

またタクシーの情報資産の活用という観点から見ても、やるべきことはたくさんある。例えばタクシーに搭載されたドライブレコーダーは、街の安全を支える重要なデータを日々記録しているが、多くの地域でその価値が社会に十分還元されているとは言い難い。タクシーの情報資産を地域の安心・安全のためにもさらに活用できるのではないだろうか。

それでも、すでにタクシーは各自治体との福祉利用券やデマンド交通、災害対応などを通じ、単なる移動手段を超えた役割を果たしていることは周知のこと。「こども110番」は、その延長線上にある取り組みだ。遠くない将来、自動運転タクシーの普及が予想されるが、われわれ既存事業者は自動運転タクシーでは決して対応できない「そこに人のいる安心」を育てていかななくてはいけないだろう。

いま、私が描くタクシーを全国の「走るこども110番」とする夢——。全国のタクシー事業者の皆様にも、この夢については是非ご一考いただきたい。そのために私のデザインマークが役立つのであれば、ご自由にお使いいただきたい。夢は大きく持たねばならぬのだ。

